

簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う

西谷15・16号墓発掘調査報告書

1993年3月

出雲市教育委員会

簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う

西谷15・16号墓発掘調査報告書

はじめに

西谷墳墓群は、全国で最も注目をされている遺跡の一つと言っても過言ではなく、特に3号墓は島根大学を中心とした調査団により発掘調査が行われ多くの成果が上げられており、西谷墳墓群の重要性がさらに増したと言えましょう。

出雲市は、『まもる出雲市』を市政運営の柱にしております。文化財保護は、まさに出雲市の重要な課題であり、大きな開発の波のなかで、古代出雲の人々の残した貴重な財産を後世に伝えていくことは我々の使命であります。

このためには、市民のみなさまの御理解と御協力が必要です。今回刊行することとなりました報告書が、西谷墳墓群の重要性を理解するために、また、出雲の古代史を考える上で、少しでも寄与できるところがあれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりましては、地元の方々、ならびに関係機関にたいして厚くお礼申し上げます。

平成5年（1993）3月

出雲市教育委員会

教育長 鐘築芳信

例　　言

1、本書は、出雲市教育委員会が島根県出雲農林事務所から依託を受けて実施した簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化発掘調査の概要である。現地調査は平成3・4年度、報告書作成は平成4年度にそれぞれ行った。

2、発掘地は、次の通りである。

15号墓　　出雲市大津町3529-1他

第1調査区（16号墓）　　出雲市大津町353他

第2調査区（番外4号墓）　出雲市大津町3540他

3、調査組織は以下の通りである。

（平成3年度）

調査員　松山　智弘（出雲市教育委員会文化・スポーツ課主事）

米田美江子（出雲市教育委員会文化・スポーツ課臨時職員）

調査指導　渡辺　貞幸（島根大学教授）

丹羽　野裕（島根県教育委員会文化課主事）

調査協力　和田　晴吾（立命館大学教授）、鳥谷　芳雄・西尾　克己（以上島根県教育委員会文化課）、樋野　真司（出雲考古学研究会会員）、宍道　年弘・常松　幹夫（以上斐川町教育委員会）、原田　敏照・守岡　正司（以上島根大学学生）

遺物整理　河井　栄子・矢田　愛子

（平成4年度）

調査員　川上　稔（出雲市教育委員会文化・スポーツ課係長）

湯村　功（出雲市教育委員会文化・スポーツ課主事）

調査指導　角田　徳幸（島根県教育委員会文化課主事）

遺物整理　河井　栄子・矢田　愛子・石川　佳子

4、本書で使用した、方位は磁北をしめす。

5、本書の執筆・編集は、調査員が討議して行い、文責は目次に表記した。

6、本書に掲載した「遺跡位置図」は、出雲市管内図を、「調査区位置図」は、古川コンサルタントより提供を受けたものを使用した。

7、本遺跡出土の遺物及び実測図・写真是、出雲市教育委員会で保管している。

目 次

I.	位置と環境	（湯村）	2
II.	西谷墳墓群の概要	（松山）	5
III.	調査に至る経緯	（川上）	6
IV.	西谷15号墓の概要	（湯村）	9
V.	第1調査区（西谷16号墓）の概要	（松山）	17
VI.	第2調査区の概要	（松山）	26
VII.	周辺の遺跡	（松山）	28

図 版

I. 位置と環境

西谷15、16号墓は、出雲市街地東方の丘陵地に位置する。この付近には標高10mほどの段丘面と標高40～50mの丘陵が認められる。前者は松江市南郊を模式地とする乃木段丘に対比されるものである。このような標高の低い段丘面は松江市南郊から西へつながり、玉湯町・宍道町・斐川町と認められるが、西谷墳墓群あたりで一度途絶え、湖陵町に至って再び現れる。このように低い段丘面が出雲市域で発達しないのは地質学的な背景があろうが、その代わり出雲市内の沖積平野では斐伊川の流れにより形成された旧自然堤防が特徴的にみられる。標高40～50mの丘陵は、もともと出雲市大津町山廻を模式地とする山廻段丘と呼ばれる段丘で、開析が進んでいるため丘陵状を呈しているものである。山廻段丘を構成するのは風化の著しい礫層で、この礫層は一の谷公園周辺の露頭で観察できる。

県立出雲商業高校東側の山廻段丘上には弥生時代末の四隅突出形墳丘墓や古墳が築かれており、西谷墳墓群と呼ばれている。今回報告する西谷15、16号墓もこの西谷墳墓群を形成する古墳である。

周辺には多数の遺跡の存在が知られている。縄文時代の遺跡は西谷丘陵周辺では土器を伴う良好な例は確認されていないが、丘陵上で石鏃が採集されていることから今後資料の増加が期待される。

弥生時代の遺跡としては中山丘陵遺跡・斐伊川鉄橋遺跡・石土手遺跡が知られている。中山丘陵遺跡は西谷丘陵北側の丘陵上を中心に遺物の散布が確認されている。斐伊川鉄橋遺跡はJR山陰本線の鉄橋建設の際斐伊川の川底から弥生土器等が出土したものである。石土手遺跡は斐伊川鉄橋遺跡の西側に位置し、水源地建設の際に地表下約7mからやはり弥生土器等が出土している。出雲平野においては旧自然堤防上に矢野遺跡・天神遺跡・古志本郷遺跡といった大規模な集落遺跡が形成されているが、西谷丘陵周辺にはそのような集落遺跡の存在は今のところ確認されていない。しかし大規模な墳墓群が築かれていることを考えれば、この付近にも大規模な集落遺跡が存在することは十分予想されるところである。

古墳時代になると出雲平野には大念寺古墳・塚山古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳・宝塚古墳等の大規模な横穴式石室をもつ古墳が出現するが、これらはいずれも後期のものであり、それ以前の前期・中期古墳はあまり存在しない。また平野南部の丘陵を



第1図 西谷墳墓群と周辺の遺跡

中心として上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群をはじめとする横穴墓が多数築かれ、後期とそれ以前の様相の違いを一層鮮明にしている。西谷丘陵周辺の古墳時代遺跡は西谷墳墓群を除き、前途の斐伊川鉄橋遺跡・石土手遺跡で土師器の出土が報告されているほか、中山丘陵遺跡では須恵器が採集されている。横穴墓に関しては西谷墳墓群の直近に直刀の出土をみた西谷横穴墓があるほか、やや南の丘陵には3支群からなる権現山横穴墓群が存在する。この近くには径約17m、高さ約2mの円墳である権現山古墳や、長廻遺跡といった土師器・須恵器の散布地、さらに長廻横穴墓がある。

奈良時代以降になると、この近辺では長者原廃寺という古代寺院跡が見つかっており、また西谷丘陵出土の蔵骨器や管沢古墓といった火葬墓の存在も知られている。さらに平家丸城跡・向山城跡といった中世山城が築かれるなど、この地がなおも主要な位置を占めていたことが窺える。



第2図 西谷墳墓群分布図

II. 西谷墳墓群の概要

西谷墳墓群は、斐伊川が平野へと注ぎ込むちょうど入口部分の丘陵上に位置する。墳丘を有するものが、今回調査したものも含めて16基（うち四隅突出型弥生墳丘墓6基）、墳丘を持たないもの4基が知られている。この墳墓群がのる丘陵は、県立出雲商業高校の東側にある丘陵と、斐伊川の西側にある丘陵の2つがあり、この間の谷を西谷と読んでいる。

西谷の西側丘陵は、南北に伸びており、北より1～6号墓まであり3号墓と4号墓、5号墓と6号墓の間には小さな谷が入っている。1～4号墓・6号墓は、四隅突出型墳丘墓で尾根に直行して墳丘の長辺が設定されている。5号墓は前方後方形の墳墓である。

1号墓は、1972年に発掘調査されており、大部分は崩壊していたものの、貼り石の一部と主体部4つを検出している。2号墓は、万祥山の土取で半壊しており南半分のみ残存している。東西での規模は15m、突出部を入れると25mを測る。また西側墳裾部で石列を確認できる。また、削平された断面において2つの主体部が確認されている。3号墓は、1983年～1992年にかけて、島根大学を中心に発掘調査が実施されている。墳丘の規模は、東西40m・南北30m（突出部を含めると東西50m・南北40m以上）・高さ4.5mを計り、墳丘斜面には貼石が並べられ、墳裾には、敷石・列石が2段に並べられている。中心主体の一つである、第1主体部からは、100個体以上の供献土器が出土しており、朱を敷きつめた棺やそれを包む槨の構造など多くの興味深い資料を提供している。4号墓は、1953年にこの墳墓の中で最初に発見された。しかし当時は、墳墓としての認識はされておらず、採集された土器は弥生系のものとして紹介された。

西谷の東側丘陵には、8号墓・10～16号墓まである。8号墓は現在清流園がある所で、墳丘は削平され形状をとどめていないが、工事の際に赤色顔料と細砂が発見されており、四隅突出型墳丘墓であった可能性がある。10～16号墓は、小規模な、方墳か円墳である。

この丘陵の谷を隔てて北側の丘陵に9号墓がある。墳頂には三谷神社が鎮座していることもあり、かなり改変を受けている。墳丘規模は、東西45m・南北38mを下らない規模と推定されている。

参考文献 出雲考古学研究会「西谷墳墓群」（『古代の出雲を考える2』1980）

渡辺 貞幸「西谷墳墓群の調査」（『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』

島根大学法文学部考古学研究室 1992）

III. 調査に至る経緯

簸川南地区広域営農団地農道整備事業のうち、西谷墳墓群の取り扱いについては、昭和60年（1985）8月7日付で出雲農林事務所からの文書照会があり、出雲市教育委員会からは、同8月19日付で教社第288号で、既存の墳墓群を損なうことのないように特に留意して事業計画を進めるように回答した。

しかし、平成2年（1990）10月15日の出雲農林事務所との協議において、農道ルートに6号墓がかかることがわかったため、ルートの変更を申し入れたが、反対する地権者の土地が6号墓のすぐ近くにあり、農道のルートを南に変更することはできないので記録保存をお願いしたいとのことであった。

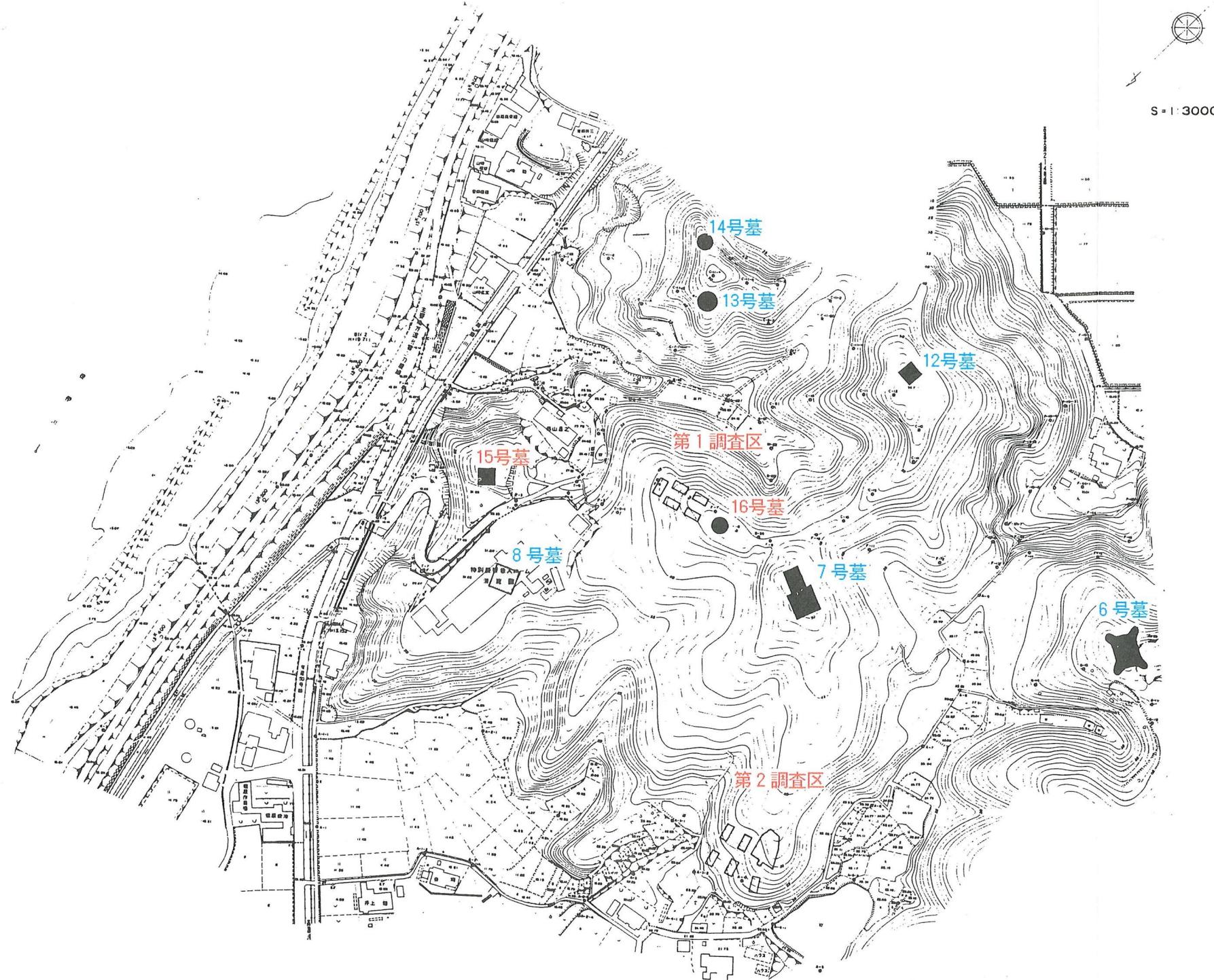
そこで、平成2年（1990）11月9日島根県教育委員会文化課も加わって協議し、県農林事務所に対し、西谷墳墓群が重要な遺跡であることを認識してもらい、ルートから6号墓をはずすことをもう一度検討してもらうことで、とりあえず協議を終えた。

その後、平成3年（1991）2月21日付出雲農林第2651号で、6号墓をはずし、南側をかきめるように新ルートが提示されたので、6号墓を損う恐れのないように十分配慮するとともに、事業着手前に分布調査を実施する必要があることを伝えた。

分布調査は、平成3年（1991）5月23日、出雲市教育委員会職員2名と島根県教育委員会職員1名に出雲農林事務所職員2名が同行し、農道予定地を踏査した。その結果古墳1基、遺物散布地1カ所、遺跡の存在する可能性のある要注意地点1カ所が発見されたため、工事着手前に発掘調査等、必要な措置をとることを通知した。

それを受け、平成3年（1991）6月14日付出雲農林第1086号で埋蔵文化財発掘調査の依頼があったので、10月から第2地点、第3地点の試掘調査を実施し、古墳1基（16号基）と土壙墓が発見されたため、引き続き発掘調査に移行し、11月18日に着手し、平成4年（1992）3月10日に終えた。

また、分布調査で確認されていた15号墓については、平成3年度に調査ができなかつたため、平成4年（1992）4月21日に文化財保護法57条の3に基づく発掘通知を出雲農林事務所から提出した後、5月26日に出雲市教育委員会から法98条の2の規定による発掘調査の通知を行った。発掘調査は、平成4年（1992）7月2日に着手し同年8月31日に終え、簸川南地区広域営農団地農道整備事業のうち、西谷墳墓群にかかわる調査事業の現地調査のすべてを終了した。



第3図 調査区位置図

IV. 西谷15号墓

概要

本古墳は従来その存在が知られていなかったが、南部広域農道のルート内を分布調査した際に発見されたものである。発見当初は円墳ないし方墳として把握され、西谷15号墓と命名された。

古墳が位置するのは眼前に斐伊川の流れを臨む丘陵上で、丘陵が小さく開析され東南に突出する部分の先端付近に位置する。西谷墳墓群の中では東端に所在することになる。

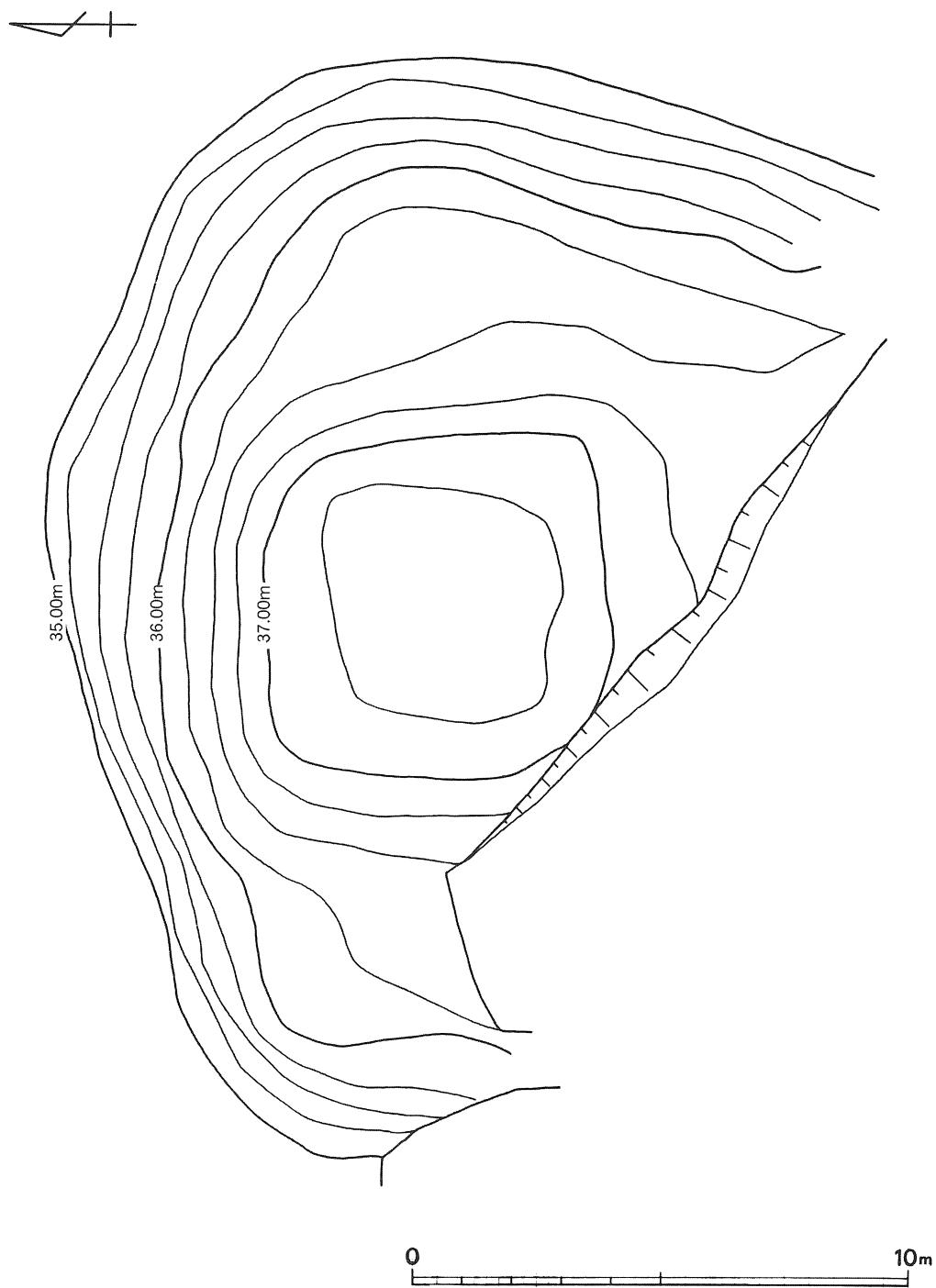
本古墳からは埋葬主体部1基と墳丘の東西にそれぞれ溝状遺構が検出された。出土遺物は刀子・須恵器片・土師器片が認められたが、Ⅰ期の須恵器が確認されるなど、遺物の量は多くないものの重要な知見が得られた。

墳丘

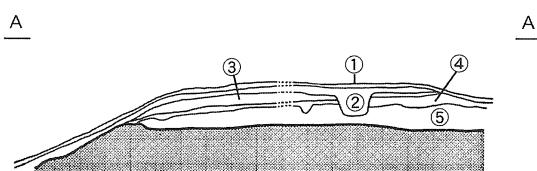
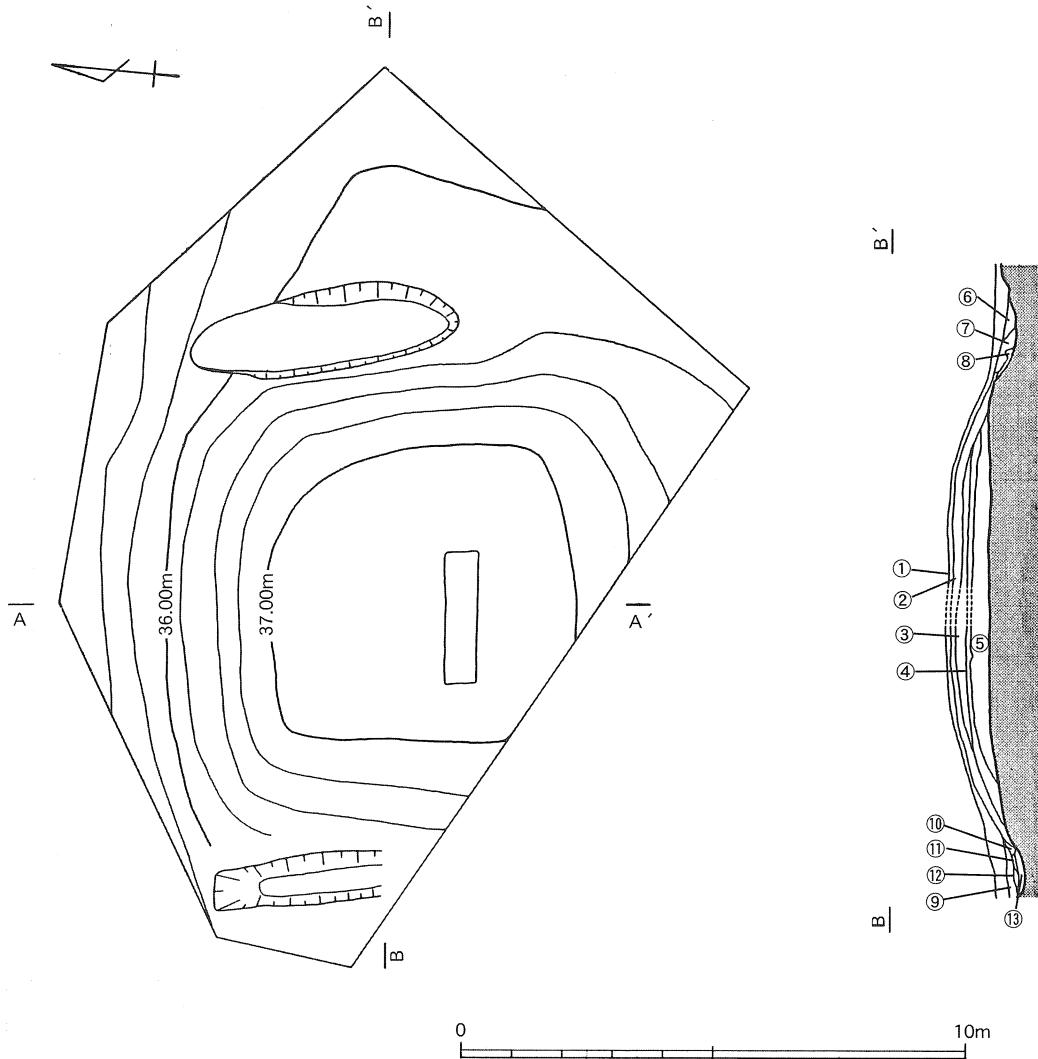
墳丘は南西部を後世の墓地造成により削られているものの、一辺約15mの方墳の形状を比較的良好に残していた。高さは0.9mを測る。墳丘上には約6m×6mの平坦面を有しており、墳丘の傾斜が緩やかなこと也有って扁平な印象を受ける。古墳の東西に溝状遺構が認められたが、北側は墳丘が流出している可能性があり、また南西部は削平されていることから、この遺構が墳裾全体を巡るものかは不明で、明確に方形状の区画を行っていたかは判然としない。

東側の溝状遺構は古墳の東側から北東にかけて検出された長さ約5m、幅0.8dmの浅い掘り込みである。平面形状は長楕円形で、北側が先細りとなる。横断面形状は全体に緩いカーブを描いているが、北側では立ち上がりやや急となる。ここでは土師器片の散布が認められた。西側の溝状遺構は、削平により南側への広がりは不明であるが、幅1.2mの深い掘り込み状を呈する。壁の立ち上がりは穏やかで底面は狭い。ここからは須恵器片・土師器片が出土したが、東側の溝状遺構に比べて遺物の集中は密であった。

墳丘の築造は盛土によっている。古墳の築かれているのは丘陵の尾根上であるが、墳丘を断割って観察したところによると地山面の高まりは見られず、自然の地形を利用したものではないと思われる。逆に地山面が平坦となっていることから、尾根をある程度削平した後に墳丘を築いた可能性もある。墳丘を構成する土層は4枚に分層され、これらの観察から第3～5層を積み重ねるようにして台形状に作り出し、その後第2層で全体を覆い墳丘を仕上げている工程を復元することができる。溝状遺構は墳丘の築造の後



第4図 西谷15号墓調査前地形測量図



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|
| ①表 土 | ⑤明褐色粘質土層 | ⑨暗黃褐色粘質土層 | ⑬暗褐色粘質土層 |
| ②黃褐色粘質土層 | ⑥暗黃褐色粘質土層 | ⑩明褐色粘質土層 | |
| ③赤黃褐色粘質土層 | ⑦明褐色粘質土層 | ⑪褐粘質土層 | |
| ④暗褐色粘質土葬 | ⑧暗黃褐色粘質土層 | ⑫暗黃褐色粘質土葬 | |

第5図 西谷15号墓調査後地形測量図

掘り込まれている。なお第4層はやや黒みがかった暗褐色を呈し、下面に凹凸の認められる部分もあることから、この第4層が旧表土である可能性も考えられるが、地山面の平坦さや場所によっては地山の直上に第4層が確認されるところもあることから、その可能性は薄いと思われる。

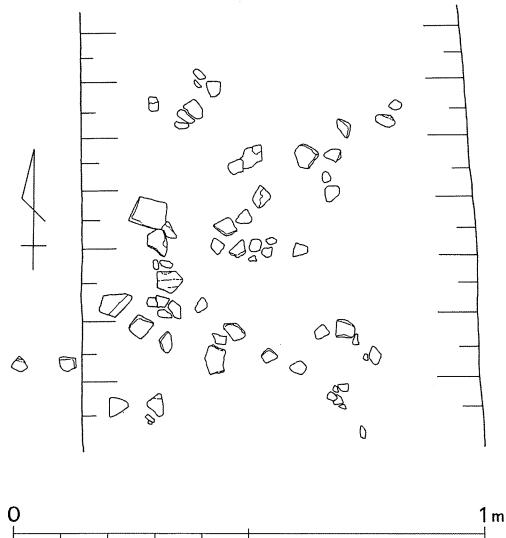
埋葬主体（第7図）

埋葬主体部は墳頂平坦面のやや南に寄った位置に掘り込まれた墓壙である。平面形状は長方形を呈し、東西2.6m、南北0.7mを測る。四隅は基本的に角ばっているが、北東隅はやや丸みを帶んでいる。長軸・短軸ともに直線的に掘られており、正長方形を意識した墓壙である。壁の立ち上がりは北側は緩やかであるが、南側は急峻なものとなっている。北西隅に壁の途中に一段面を設けており、底面が若干狭くなっているところがある。掘り込みは第3層上面からであり、深さは0.3mである。墓壙内に石棺等は見られず、木棺直葬であったものと推定されるが、木棺の痕跡は検出できなかった。

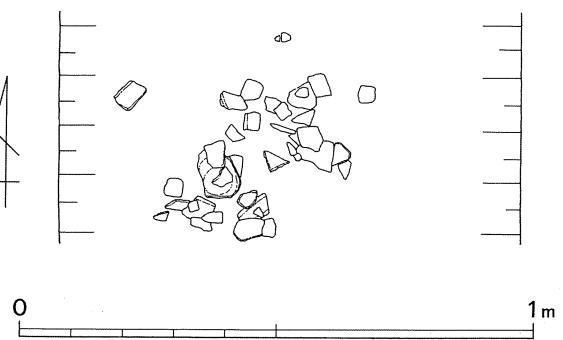
埋葬主体部からは刀子1点と土師器片が出土している。これらはいずれも墓壙の東半に認められた。遺物の出土レベルは墓壙の上面近くであり、もともと遺物は木棺の直上あるいは墓壙の埋土の上に置かれたものではなかろうか。

出土遺物（第8図）

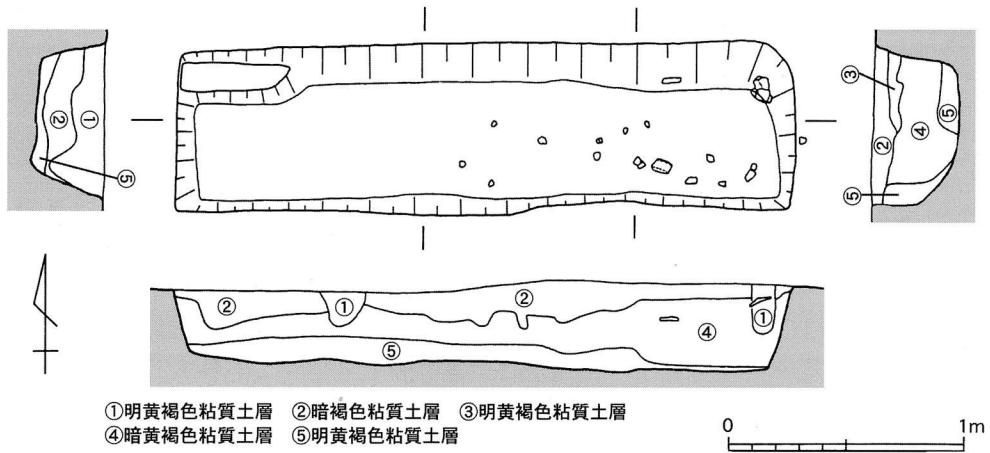
遺物は刀子と須恵器片・土師器片が出土した。須恵器片は接合により一個体に復元できたが、土師器は数個体存在するようである。以下の記述を簡単にするために土師器を胎土・焼成等から次のとおり分類する。小さな破片ばかり



第6図 東側溝状遺構土器出土状況



第7図 西側溝状遺構土器出土状況



第8図 埋蔵主体実測図

であるうえ接合例も希少であるため、この分類は個体レベルの分類ではなく、あくまで遺構間の関係を分析するための概念的なものである。

I類：胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。器体表面の風化が進んでいるため調整痕はわずかにハケの痕跡が確認できるのみである。

II類：胎土はI類に似るが、色調が赤みを帯びる。焼成はやや不良。器体外面にハケによる調整を施す。

III類：胎土はI類に酷似するが、焼成は比較的良好である。ハケによる調整が認められる。

IV類：胎土には砂粒を含むものの、焼成ともに良好。ハケによる調整が認められる。

V類：胎土に砂粒を含まず、焼成も比較的良好である。器体に赤色を施す。

(1) 埋葬主体部出土遺物

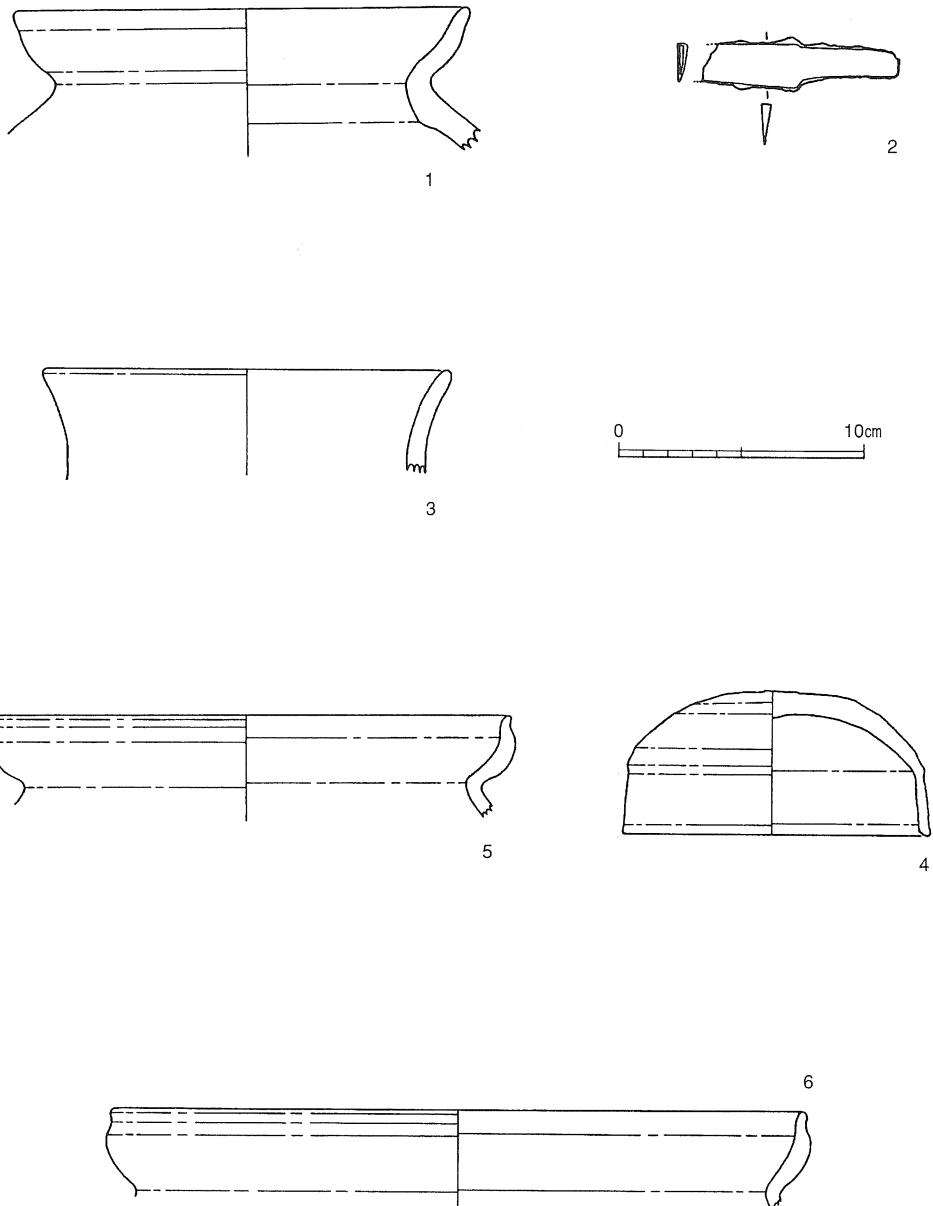
埋葬主体部からは刀子1点と土師器片が出土した。

刀子2は刃部途中から欠損するもので、現存8.0cmを測る。欠損部を見ると刃部は中空となっており、薄い鉄板を折り曲げて作っていることがわかる。

土師器はI、III、V類である。1は壺の胴部から頸部にかけての破片でくの字状に外反するものである。頸部中央では穏やかなカーブを描き、口縁部は外反する。

(2) 東側溝状遺構出土遺物

ここからは土師器片のみ出土した。前途の分類でいうII類であるが、すべて胴部の破片で器種は甕と思われる。これらはいずれもハケによる調整が施されており、



第9図 出土遺物実測図

胎土の状況からも同一個体に属する可能性がある。

(3) 西側溝状遺構出土遺物

ここからは須恵器片・土師器片が出土した。須恵器4は接合により壊蓋に復元できた。復元口径12.6cm、器高6.0cmを測る。比較的平坦な天井部をもち、体部中央付近までは穏やかなカーブを描き、明瞭な稜線を境に口縁部までは垂直に下りる。外面上面にはヘラケズリによる調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼はやや良好である。

土師器はⅡ～V類が認められる。Ⅱ、Ⅲ類は小破片が少量出土したのみである。Ⅳ類には甕の口縁部がみられる。この中には少なくとも3個体存在する。3は頸部から緩やかな曲線を描きながら外反し、そのまま口縁部にいたるものと思われる。5と6は頸部から口縁部にかけて大きく丸みを帯びながら外反するものである。胎土は非常に似ているが、5の方が丸みが大きく、別個体であると思われる。V類は内外面とも赤色塗彩するもので、接合関係を有しないため同一個体かはわからないが高壊の壊部が認められることから、V類は高壊であると思われる。

小 結

今回の調査で西谷15号墓は古墳時代中期の方墳であることが確認された。遺構は埋葬主体部として墓壙が検出され、古墳の東西には溝状遺構が認められた。遺物は刀子1点と須恵器片・土師器片が出土した。特に須恵器はⅠ期のもので、県内でも類例が少なく、貴重な発見といえるだろう。この須恵器に伴う土師器としては、胴部から頸部にかけてくの字状に外反する甕と赤色塗彩を施した高壊が確認された。このセット関係は市内の天神遺跡でも確認されており、この時期の土師器の組み合わせを示すとともに天神遺跡の土器溜出土土器の一括性を傍証したものといえよう。

土師器は前述のとおりⅠ～V類に分類したが、各遺構における土師器の分布状況を見ると、埋葬主体部からはⅠ・Ⅲ・V類が、東側溝状遺構からはⅡ類が、西側溝状遺構からはⅡ・Ⅲ・Ⅳ・V類がそれぞれ出土している。東西の溝状遺構を比較すると東側が1種類の土師器しか持たないのに対し、西側では4種類を保有するうえ須恵器が伴う。また埋葬主体部との関係を見ると東側溝状遺構は共有関係を持たないのに対し、西側溝状遺構はⅢ類とV類を共有する。さらに東西の溝状遺構間で共有するのはⅡ類のみであり、この2つの遺構は結びつきが弱く、西側溝状遺構が出土土器の内容や埋葬主体部との結びつきなどから特異な様相を示している。遺構内の土器の分布状況も西側の方が集中的

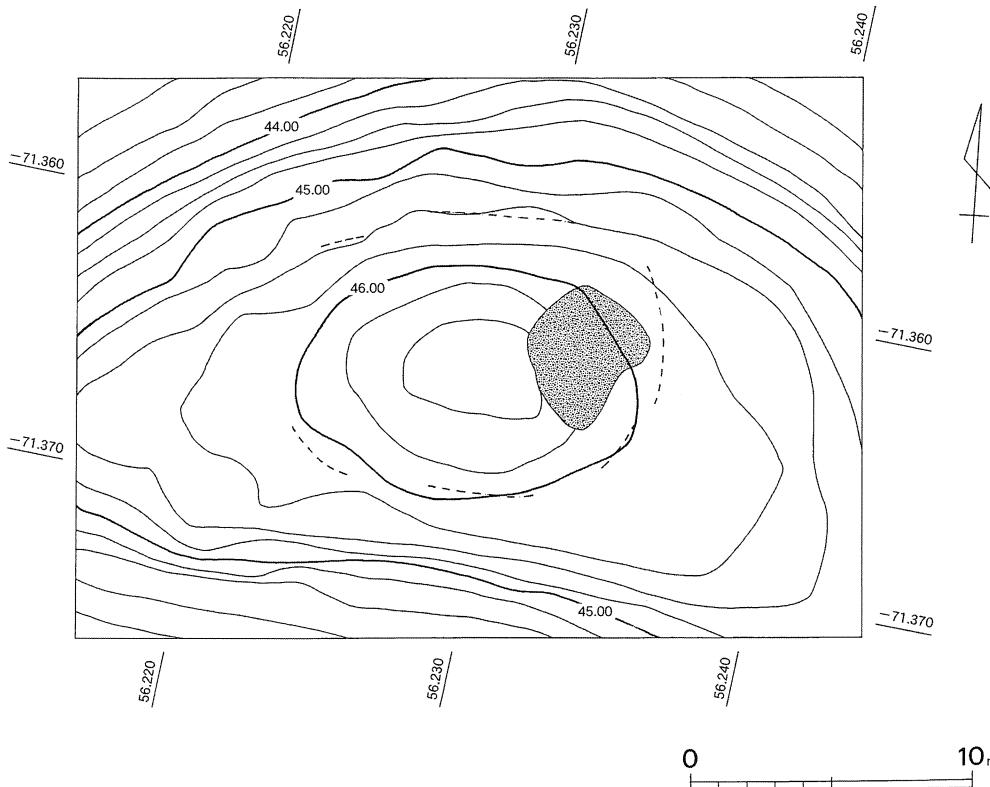
であり、埋葬にかかわる儀礼を想定すると西側溝状遺構の果たした役割が重要なものはなかったと推定できる。ただ古墳の中心をはさんで対置する形で東西の溝状遺構に土器が認められることから、東側の溝状遺構も何らかの役割を持っていたことは否定できず、今回出土した土器がすべて完形に復元できない破片であったこととも合わせ、古墳の埋葬に関して課題を提供したものといえよう。

V. 第1調査区（西谷16号墓）の概要

この調査区は、7号墓の東側の丘陵頂部に当る。わりと緩やかな傾斜で広い面積を有する。トレンチを5か所設定し調査したところ、遺構は16号墓以外は検出されてないが、弥生土器・土師器が数点出土している。地元によると、この辺は以前開墾し畑になっていたとのことである。

16号墓

第1調査区の最も高所に位置する。このあたりの基盤層は、山廻り礫層となっており、開墾時に出た礫が墳丘北側に集積されており、付近にも幾つかこの様な石の集積されているところがある。また、この時に石棺が発見され蓋石が外されている。調査前は、弱冠高まりがある程度で、古墳の判別はつかなかったが、高まりの中心部分にベルトを設定し掘り下げたところ表度直下にて蓋石の残骸と石棺の上面を検出することになった。



第10図 16号墓墳丘測量図（調査前）

墳丘

墳丘は、径11m・高さ0.5~1mの 小規模な円墳である。北東部分は やや歪な格好をしており、墳丘東側には、墳丘よりやや狭い平坦面がある。南・北側は、墳端が明瞭でなく 尾根斜面に連続している。また西側には、幅0.9m・深さ0.2m・長さ6.5mの溝が掘られている。墳丘は、 盛土をして形成されており、主体部も盛土から掘り混まれている。

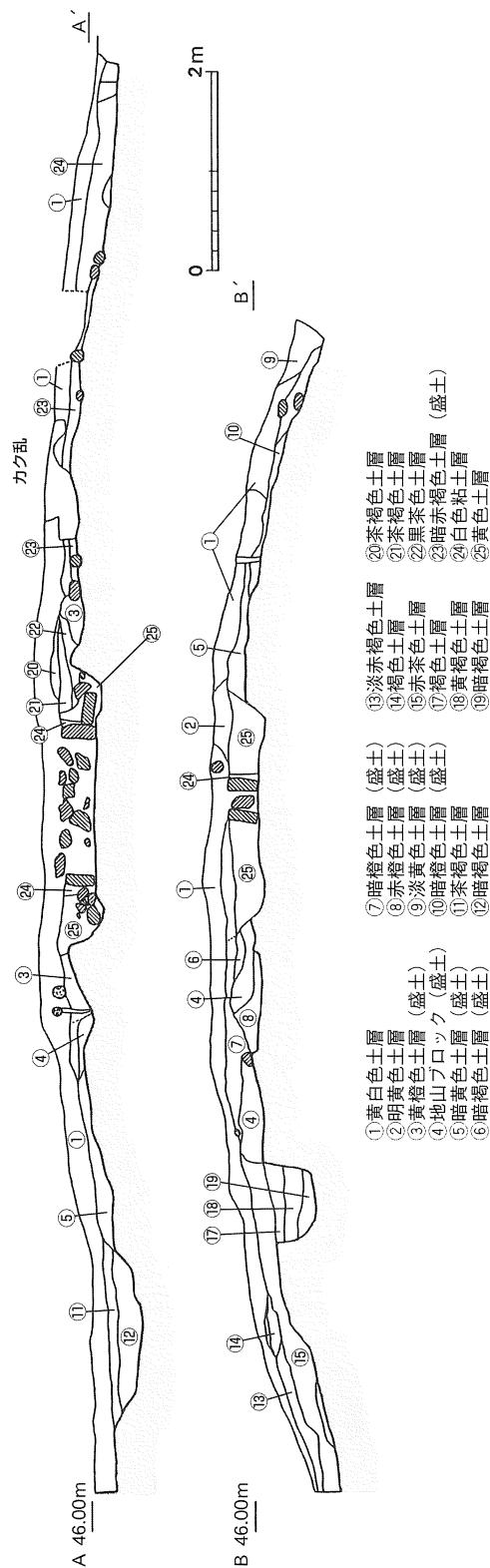
主体部

検出状況

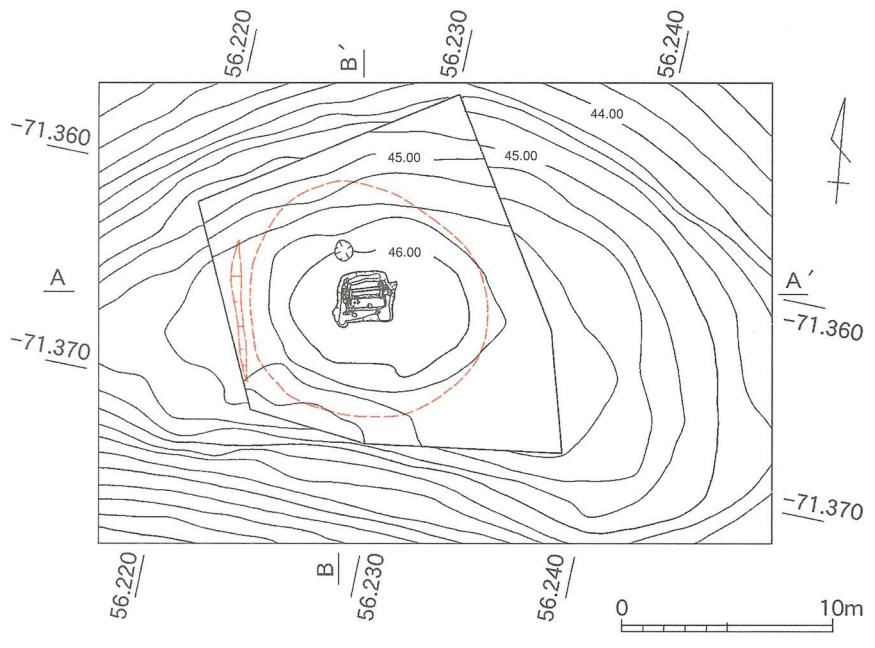
表土下10cmより石棺蓋の残骸が検出された。石棺内部については、完全に盜掘を受けており、蓋石は30~40cm程の大きさに割られ、これらの石を石棺内部に投げ込み、埋め戻しをしたようである。石棺外についてはさわられた様子はない。

石棺を据えている土壌は、南北2.3m・東西2.8m・深さ0.3mを測る不整形な長方形をしている。また、石棺が置かれている中央部の南北1.5m・東西2mの範囲は、周辺に比べて6cm程高くなっている。石材をはめこむ溝のようなものは施されていない。

石棺は、外法で長さ1.65m・幅0.5m・深さ0.3mを測り、小口で、側板を挟んでいる。石棺の周りは、



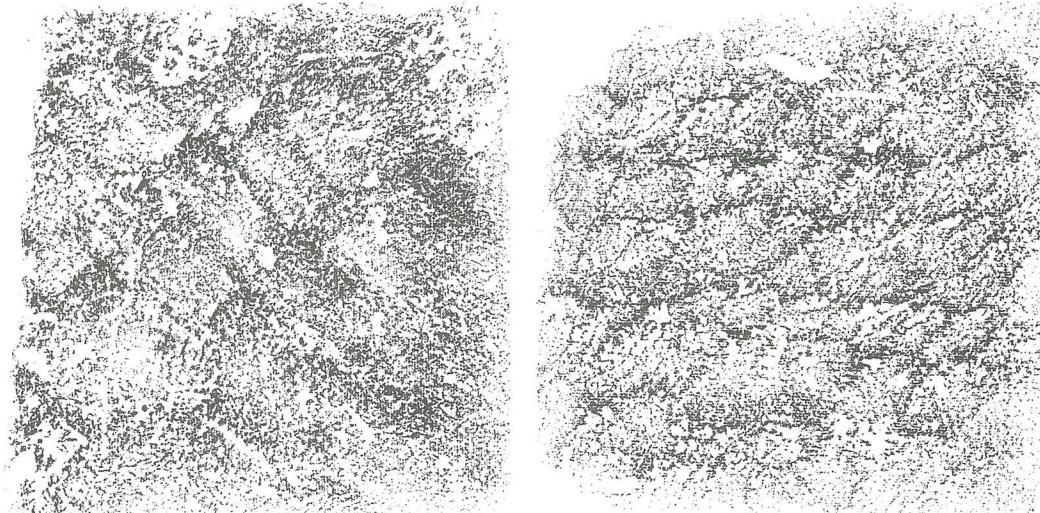
第11図 16号墓墳丘土層図



第12図 調査後墳丘測量図

南側の側板の部分を除き白色粘土で覆われている。盗堀をうけたためか、南側の側板は、内側に傾いているが、本来の内法は、長さ1.36m・幅が西端で30.5cm、東側で22cmを測り、非常に小さい。南側側板のみ2枚の石から成っており、西側の石が長さ0.31cm・東側の石の長さ1.03mを測る。小口の石材は、上面より10cmの部分は斜めにカットされている。側板が接する部分に割り込み等は施されていない。

各石材は、整美な切石を使用している。どの面も丁寧に加工しており、石棺内側には、



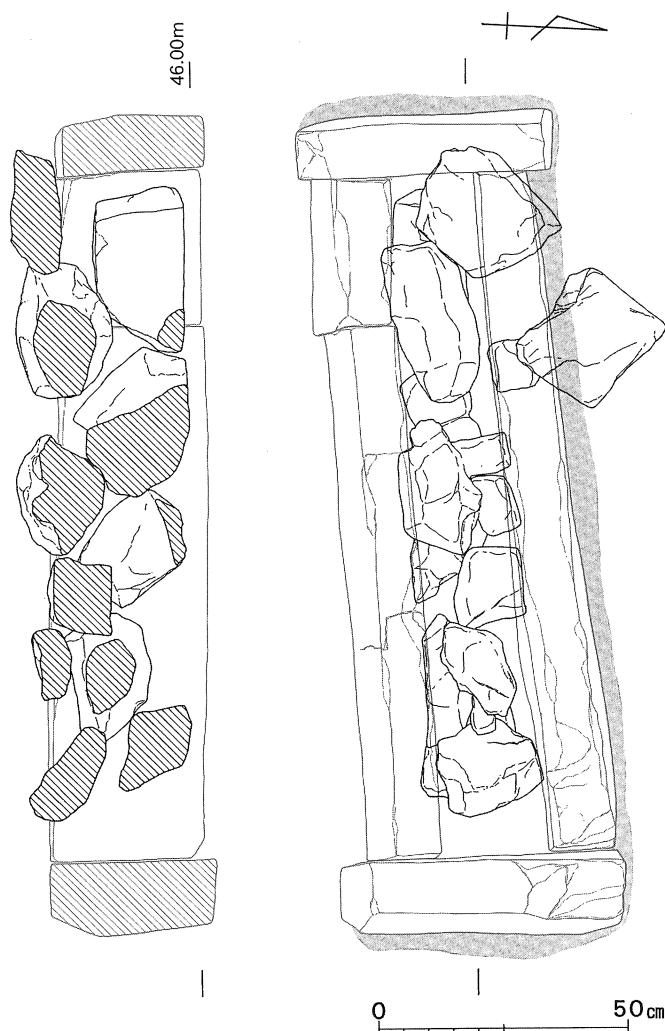
第13図 石棺加工痕（拓影）S=1/2

幅2cm程度の加工痕が1～2cm程度のピッチで全面で観察できる。一部では、幅4cmのやや大きめの加工痕も見られる。

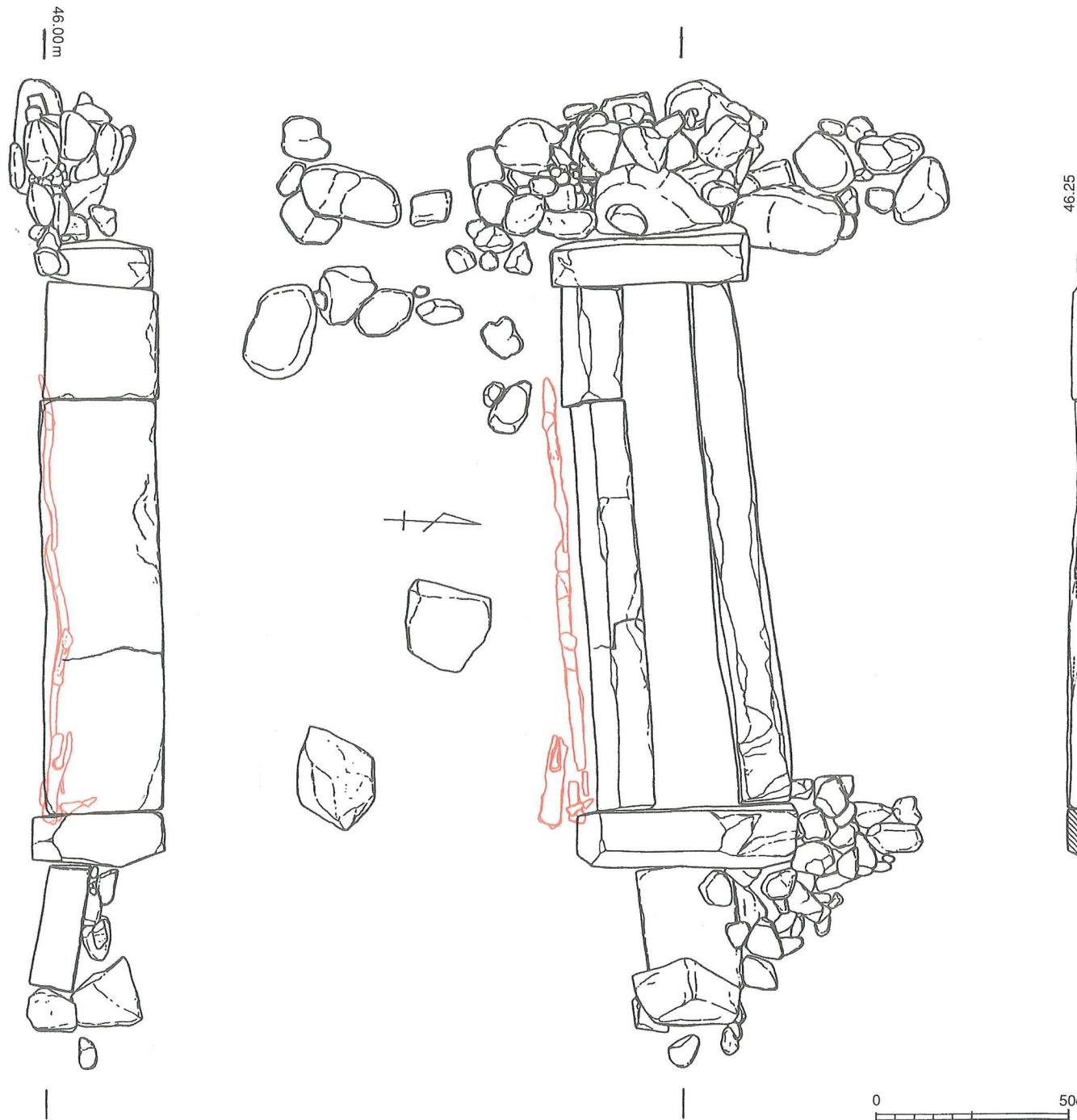
石棺の組み合わせが、小口で長辺を挟んでいるためか、小口部分には控え積みがされている。東側は、石棺と同じ石材のブロック状の石が横に置かれており、この石と土壌の壁の間に礫を挟んでいる。西側も切り石ではないが、大きめの板状の石を小口の横に置きその周りに礫を積んでいる。この東側のブロック状の石と西側の板状の石以外は、主に地山に含まれている礫を使用している。

遺物出土状況

南側の側板は、白色粘土で被覆されていなかったがこの部分の床面から鉄器が出土し

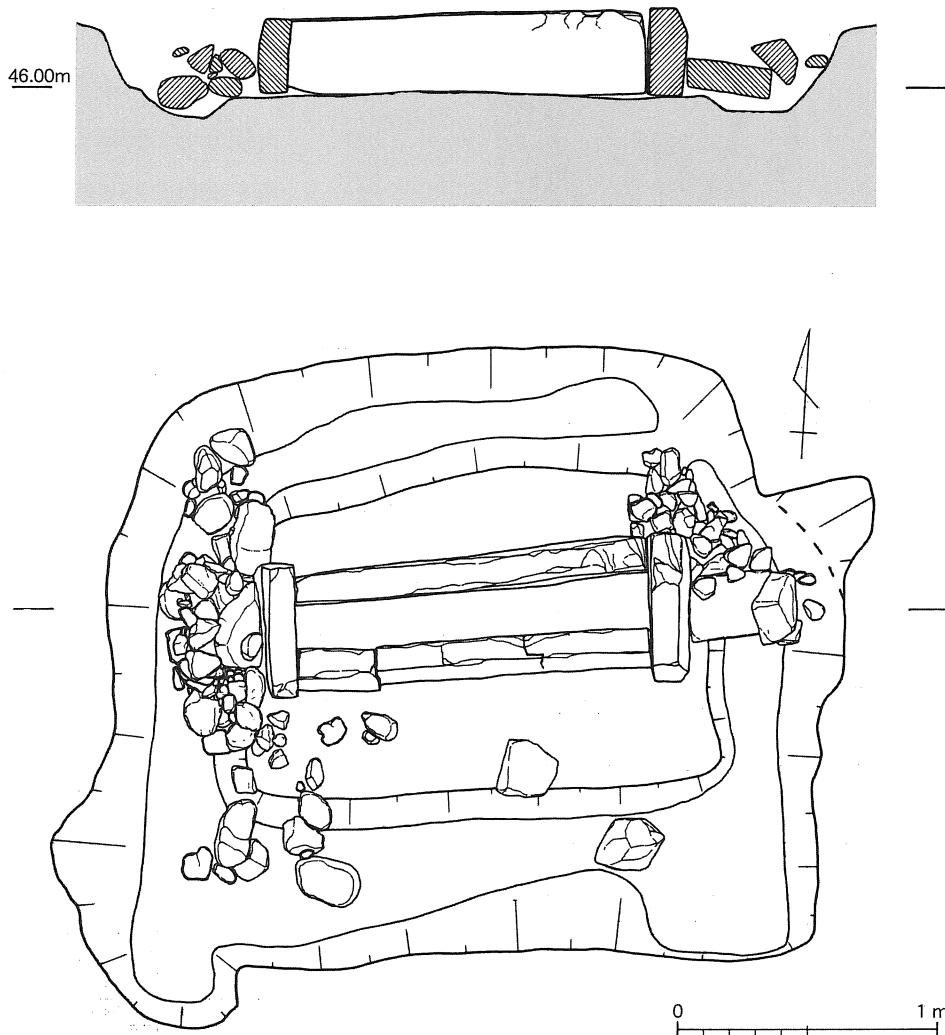


第14図 16号墓主体部（蓋石）出土状況



第15図 16号墓主体部 遺物出土状況

第16図 16号墓主体部 実測図（小口部分の石を除いた状況）



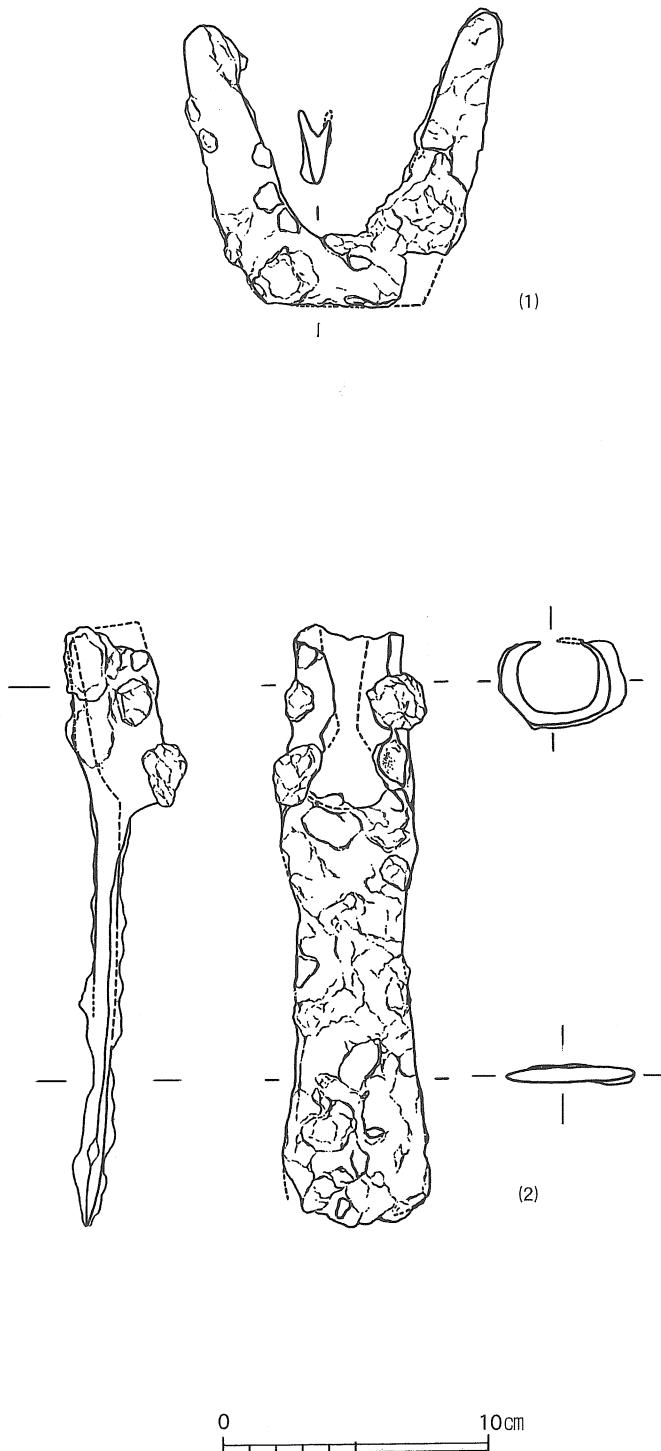
第17図 16号墓主体部実測図

ている。出土した鉄器は、鉄剣2・鉄斧1・U字形鍬鋤先1で、棺外に側板に沿ってならべられている。西側から鉄剣の短・長の順で先を西に向けており、短剣の茎が長剣の刃先の上にのっている。その隣にU字形鍬鋤先が置かれている、鏽等によりいくつかに別れていたが、出土状況から推測すると刃を下にして棺に立て掛け置いていたようである。この南に鉄斧が刃を東に向けて置かれている。

出土遺物

出土遺物は、棺外から出土した鉄器4点のみで、土器は出土していない。鉄器は、いずれも鏽が著しい。

(1)は、U字形鍬・鋤先で、長さ11cm・幅12cmを測る。刃先部は幅6cm・長さ2.7cmで、



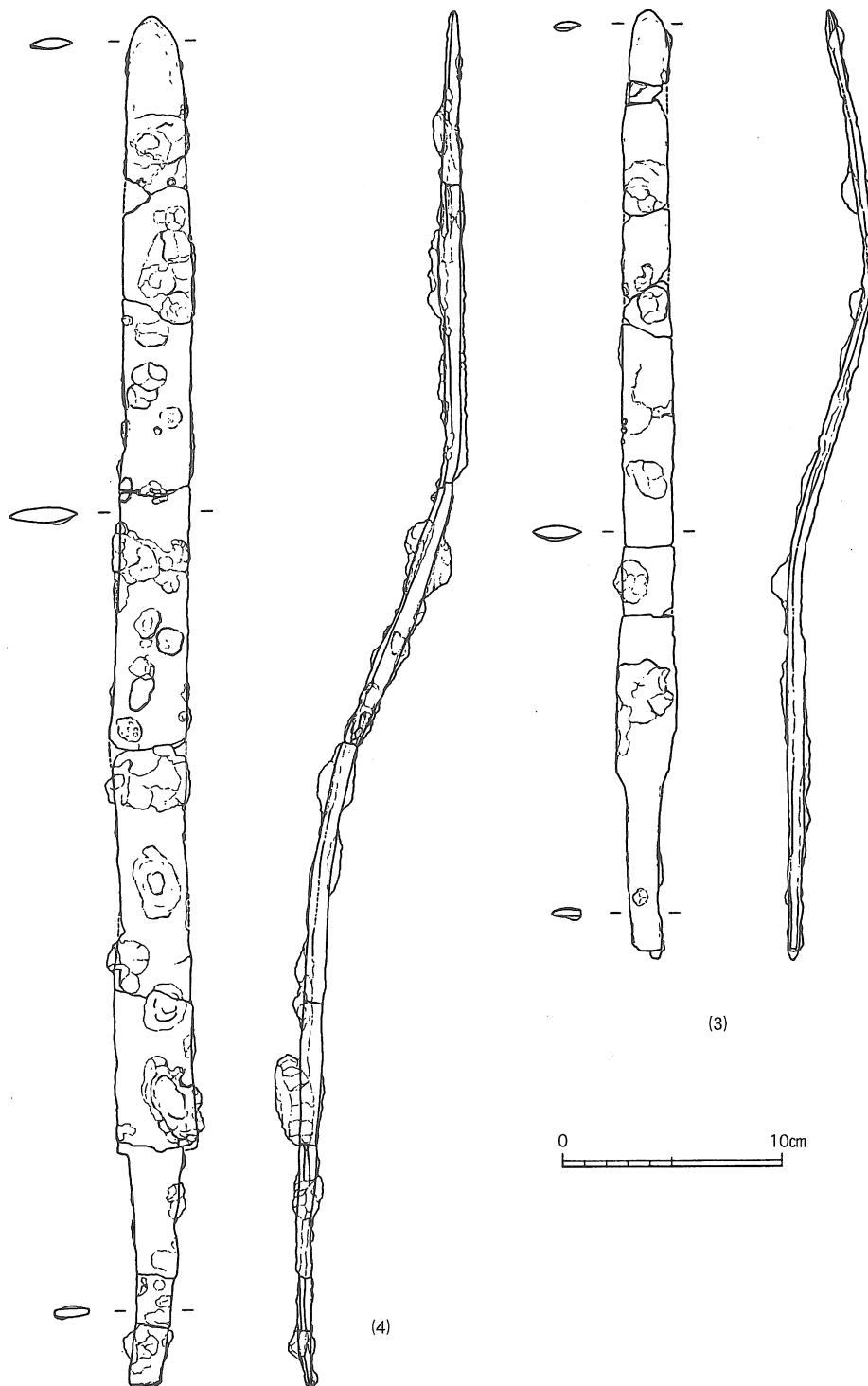
先端は直線である。耳部の幅は2.8~1.5cmで刃先部の長さよりやや小さい。割れた部分での断面で2枚の鉄板を重ね合わせた接合痕が観察できる。

(2)は、鉄斧である。全長23cm、刃部は長さ15.5cmを測る。刃部は、中央で括れており、ここでの幅は4cmで、少し開きながら伸び先端は幅5.5cmを測り、刃先は丸くなっている。袋部は、長さ7cm・幅4~5.2cmで断面は円形に近い。

(3)は、全長43cmの鉄剣である。関は内湾して茎部にいたる。茎部は幅1.5cm・長さ7.5cmを測る。

(4)は、全長63cmの鉄剣である。関は直角で、茎部は長さ11cmで幅1.5~2.5cmで茎尻に向かって幅が狭くなる。(3)・(4)とも鋒が著しく目釘穴は確認できない。

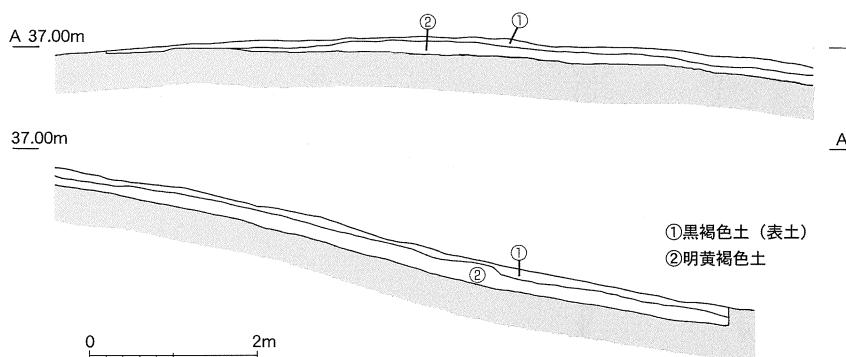
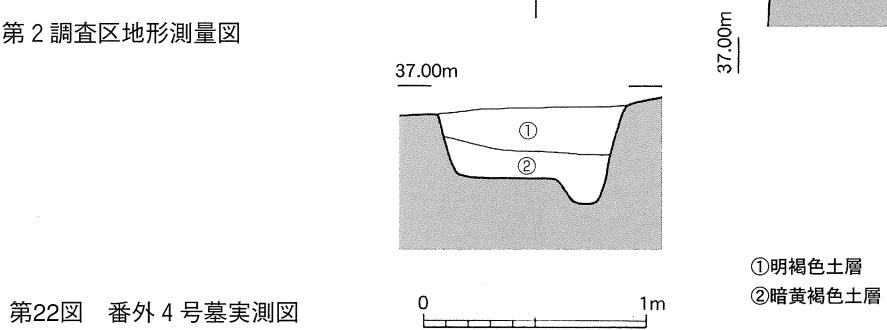
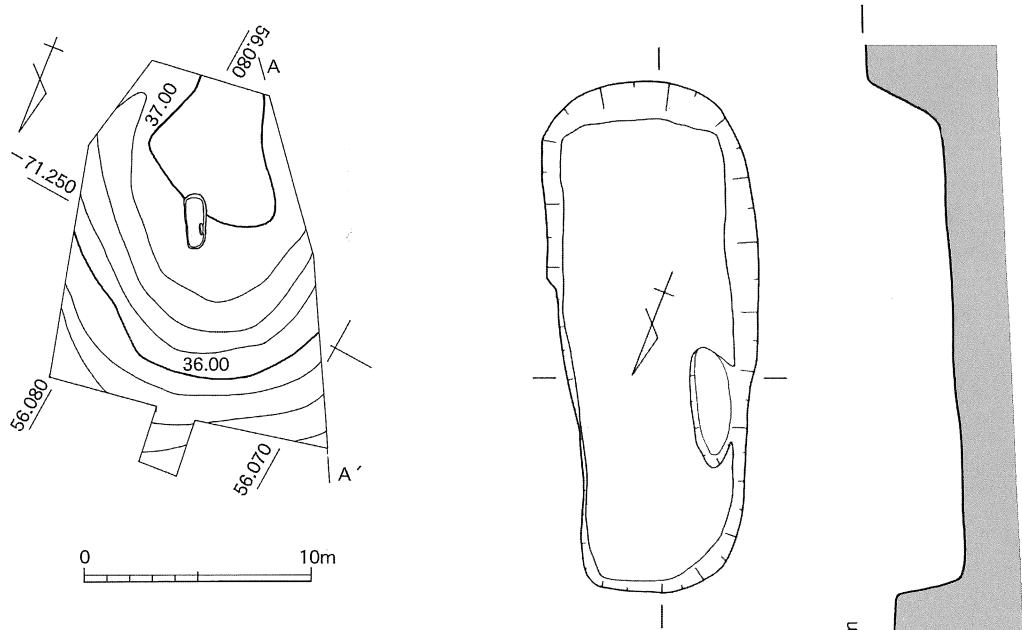
第18図 16号墓主体部出土遺物(1)



第19図 16号墓主体部出土遺物(2)

VI. 第2調査区の概要

この調査区は、西谷の入り口部分の東側の丘陵で、ちょうど谷に面したところである。



第21図 第2調査区セクション図

7号墓からのびる尾根の先端部に当たり、標高35m付近から傾斜が急になる。このあたりは、開墾等によりかなり改変を受けており、調査区南側では1m以上の段が出来ておらず、この辺から傾斜がきつくなる。トレーナーを数箇所設定したが、表土の下は地山で、遺物はまったく検出されなかった。

しかしながら、この調査区北西隅の150cmほどは、平坦になっており、開墾による段も及んでおらず、土壙を1基検出した。

番外4号

この土壙は、南北に主軸を持つ丸みをおびた長方形で、長さ2.3m・幅0.9m・深さ0.3mを測る。西壁ぞいに一部、幅15cm・長さ12cmの溝状の凹がある。遺物は出土していない。

この土壙の性格・時期について検討する手掛かりは現在のところまったくないが、ここでは、墳丘のない土壙墓と仮定し番外4号墓と呼称した。

小 結

16号墓は、箱式石棺を内部主体とする小規模な円墳である。箱式石棺は、切り石を使用し小口で長辺を挟んでおり、この組み合わせ方は、周辺ではあまり知られていない。

また、小口部分に礫で控え積みを行うのもめずらしい。

出土遺物もU字形鍬鋤先などの鉄製農工具も、これまで出雲平野ではあまり出土例はなく、大寺古墳（前方後円墳・全長50m）から、方形鍬鋤先が出土するのみで、貴重な資料と言える。

この古墳の時期であるが、土器を出土していないためはっきりした時期はわからないが、石棺の形態や出土遺物から、5世紀後半から6世紀初頭のものと思われる。番外2号墓でも箱式石棺が検出されているが、自然石を使用しており、16号墓とは、時期を異にしているようである。

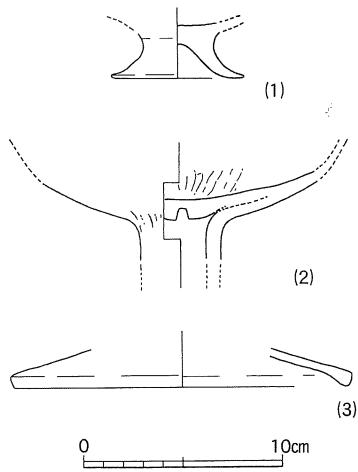
西谷の東丘陵には、小規模な古墳として今回調査した15・16号墓の他に10～14号墓が存在しており、これらも古墳時代中期の古墳である可能性が考えられ、西谷の東丘陵では、古墳時代中期の小規模古墳を中心に築造されていると言える。

これまで四隅突出型墳丘墓以外の墳墓については、ほとんど実体がわかつていなかつたが、今回の調査で、西谷墳墓群の別の一面をみることができたと言えよう。

VII. 周辺の遺跡

西谷 9 号墓表採遺物について

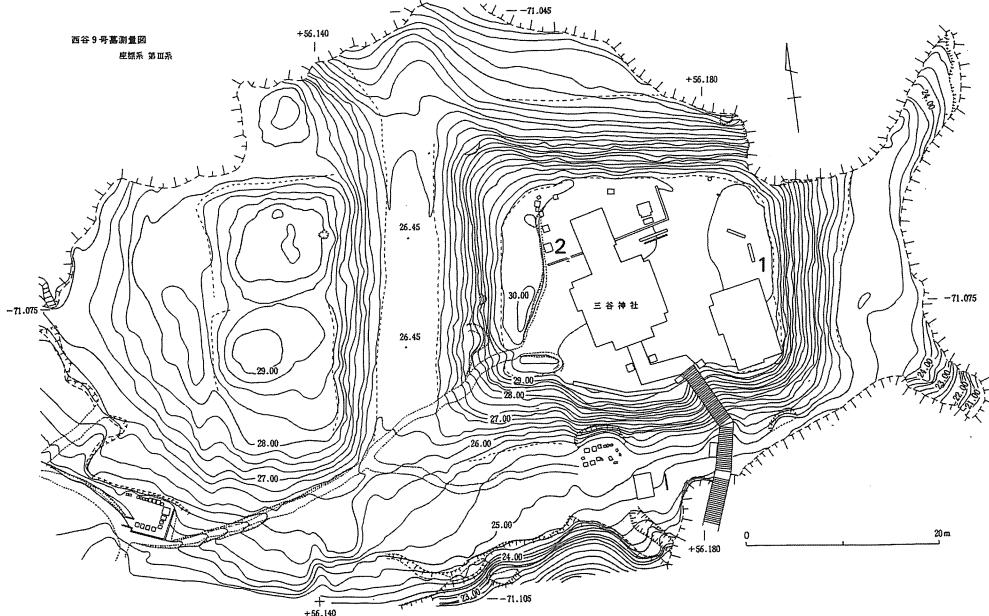
今回調査中に西谷 9 号墓にて、土器片を採取したので合わせて報告する。器形がわかるものは図示した 2 点のみで、いずれも墳頂平坦面にて採取した。



(1)は、低脚壺の脚部である。(2)は、高壺の壺と脚の接合部分である。壺底部に 6 mm の刺突痕がある。内面には、ミガキ調整が施されている。接合痕より、接合法は円盤充填によるものであることがわかる。両者とも微砂粒を多く含む胎土で、この地域で出土する土器に通常見られる胎土である。(3)は高杯の脚部と思われる小片である。あまり類例のない形態である。

遺物の時期であるが、高壺の特徴などから藤田編年 IV 期のものと思われる。

第23図 西谷 9 号墓採集遺物



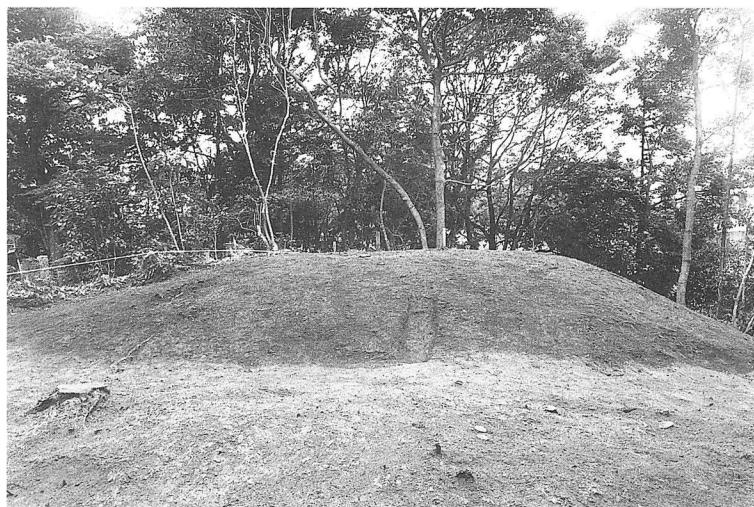
第24図 9号墓墳丘測量図（数字は土器表採地点）（『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室より転載）

図版

西谷15号墳近景
(調査前)



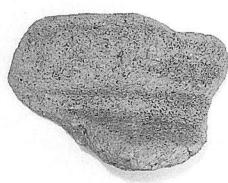
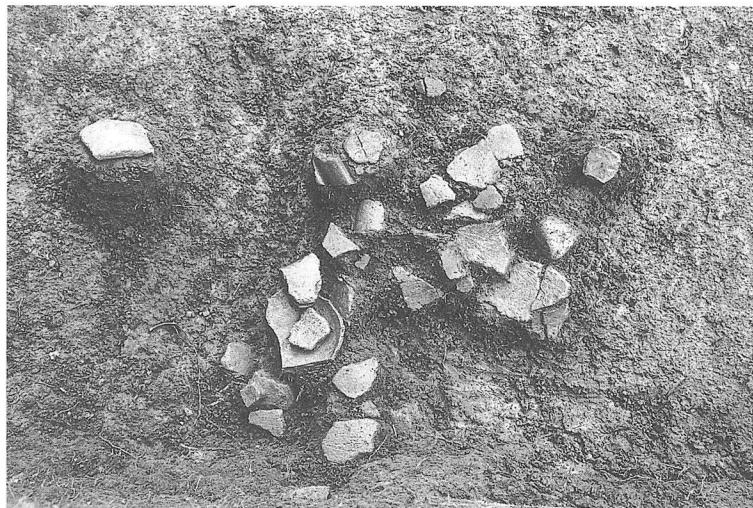
同墳丘（東から）



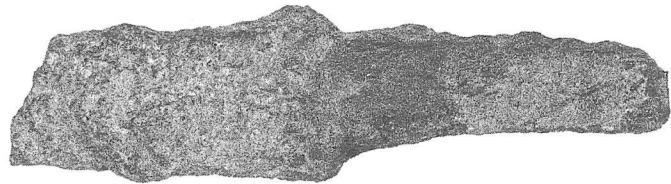
同埋葬主体



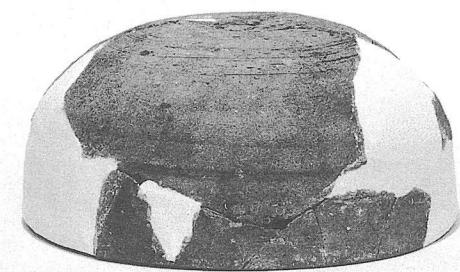
西谷15号墳
西側溝状遺構
遺物出土状態



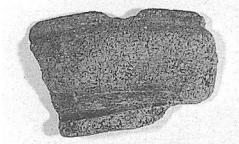
1



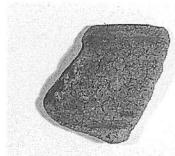
2



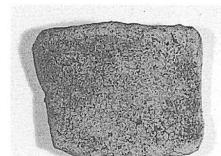
4



5



6



3

出土土器（須恵器、土師器）、刀子



西谷16号墓墳丘
(調査前)



西谷16号墓墳丘
(調査後)



主体部検出状況



主体部完堀状況



東側小口部分



東側小口部分（礫を除いた状況）



東側小口部分



西側小口部分



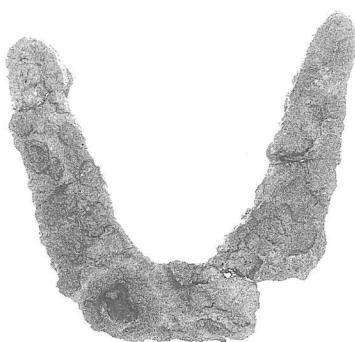
西側小口部分



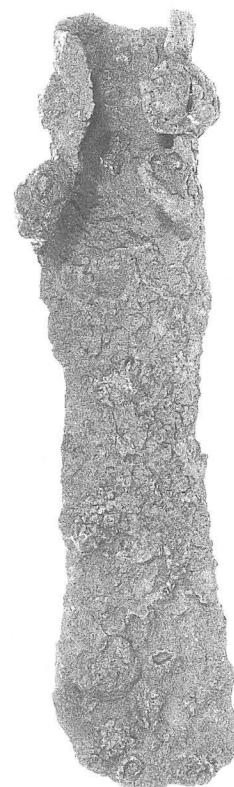
遺物出土狀況



遺物出土狀況



U字形鍛鋤先



鐵斧



鉄 剣 (大)



鉄 剣 (小)



第2調査区



番外4号墓